3
1
1

二〇一一年太陽系第三惑星地球。

地球と言っても『ちきゅう』と読んではいけない。地球は『ちたま』と呼ばれる星で、地球（ちきゅう）が浮いている銀河系の双子銀河にある双子星である。

第一章　聖史の場合

冬の寒さも和らぎ、冷たい空気に差し込む日差しからは暖かさを感じる様になった頃。

大日本帝國総理大臣である新橋聖史（しんばしせいし）は、国会議員で有り大学時代からの友人の岸本（きしもと）と、たまの休日に喫茶店でお茶でも飲もうと、紅茶専門店を訪れた。

白を基調とした、所々アンティーク品等が置かれた店内。その中に有る二人がけのテーブルに通される。

席の脇に立ち、深く被っていたつばの広い帽子を外し、ベージュのコートを脱ぐ。それから木の皮の様な物を編んで作られている椅子に腰掛け、聖史は岸本と向かい合ってメニューに目を通しながら、普段仕事の時は話せない、取り留めのない話をする。

真っ白なテーブルクロスの上でメニューを開き、膨大な数の紅茶の中から一つ、飲みたい物を決める。

「岸本君は何頼むか決めた？」

「おういえ。まだだわ。俺話しながらメニュー決めるのって苦手なん

だよな」
　岸本も手元のメニューをぱらぱらと捲りながら目を通し、これだという顔をして指を差す。
「これにするわ。前に来た時、アッサムにはミルクが合うって悠希君が言ってたし」
「あら？
あなた悠希とここに来たことあるの？」
　突然出てきた可愛い弟の名に、聖史は岸本の事を睨み付ける。
　岸本はぎこちない笑みを浮かべて、男同士の話が有ったなどと弁解しようとしているが、聖史の冷たい視線は変わらない。
　ぎこちない空気が流れる中、麻のスーツを着たギャルソンが注文を取りに来たので、二人とも紅茶の銘柄を挙げる。
　ギャルソンが去った後、岸本が話題を変えようとしているのか、聖史にこう話しかけてきた。
「そう言えばケーキとか頼まなくて良いのか？」
「ケーキ？
そうね、頼みたいのは山々なのだけど、近々美味しい物を沢山食べ

に行く予定があるから、その時の為に節制しているのよ」
「へぇ、美味しい物」
聖史の言葉を聞いた岸本は、どうやら料亭やレストランなどを連想した様で、どの店に行くのかと訊ねたが、聖史の答えはそう言う物では無かった。
来月辺りに家族揃って親戚の家に行くから、その近辺で採れる野菜や果物、特産品などの美味しい物を沢山買ったり食べたりする予定なのだという。
なるほど、縁のある所にお金を落とすのは良い事だと、岸本も言う。それから、お勧めのお土産が有ったら買ってきてくれと聖史は頼まれたのだった。

岸本と喫茶店に行ったあの日から数日。
聖史は職務をこなしながら、忙しい日々を送っていた。
いつも通りではあるけれど、どうやって野党との折り合いを付けるかという事に頭を悩ませる日々。
この日も、今後の指針についてどうするかという与党内会議をし

ていた所だった。
突然、それは訪れた。
置かれている重厚な椅子でさえも軋みを上げる激しい揺れ。
背の低いテーブルは有るが、身を隠せる様なところが無いその会議室で、議員達は椅子から降りて床に屈み込む。
いつまで続くかわからない、不安を煽る大きな地震。
本当に響いていたのかはわからない、けれども皆が感じたその轟音が鳴り止んだ頃には、豪奢な壁紙と重厚なカーテンに彩られた大きな窓のガラスに、一筋の罅が走っていた。

その日から、聖史の総理大臣としての業務は過酷な物となった。
震源地である東北で、大きな地震と津波によって住む所や家族を亡くした人々への必要とされる援助の手配をしなくてはならなかったし、それに加え、今まで日本国がクリーンなエネルギーとして普及を進めてきた原子力発電所が、損壊したのだ。
それらは、僅か数日で押し寄せてきた。
まず聖史が指示を出したのは、陸海空軍を被災地に派遣し、行方

不明者を捜索すること。
　そして次に出した指示は。
「内閣総理大臣として命じる。
この度の震災、特に原子力発電所に関する情報を民間放送局が発信する際、言論規制、報道規制を行う」
　この命令に、反対する者も居た。
　しかし聖史は折れない。
　何故言論規制や報道規制を行うのか、その理由はこう言った物だった。
　第一に、民放による不必要な取材の為に、行方不明者を捜索する軍の行為を妨害されることが有ってはならない。これは先の阪神淡路大震災、新潟中越地震の際に学んだことで有る。
　第二に、民放による取材不足や不確かなものを根拠とした情報発信で、現場に居る人々及び全国民に必要以上の不安を与えることが有ってはならない。
　第三に、間違った情報で被災地の人々を貶めることが有ってはならない。

本来なら言論規制など、やりたくはない。
けれども、聖史は国民やメディアの中には、愚かな人種が多数存在することを知っていた。
その愚かな人々から国民を守るのは自分の仕事で有り使命なのだと、聖史は固い決意を胸に抱いていた。

震災から数ヶ月後、言論規制をしていると言う事がネットで囁かれ、聖史の元には幾多の罵倒が届いていた。

その中でも、聖史は寝食を削ってでも対応を続けた。

聖史自らが被災地に入るべきだという声も有る。しかし、未だ混乱が続く中、聖史が被災地に入って何ができるだろうか。感情的になって被災地へ赴くことは簡単だ。しかし今は、この場に居て各地へ適切な指示を出すことの方が有益で有る。

聖史自らが原発事故現場へ赴くべきだという声も有る。しかしそれもまた、適切な対処では無い。素人が迂闊なことを言うよりは、専門家が行う対処に任せた方が、適切に事を済ませられるだろう。

ただひたすらに毎日情報を集め、分析し、聖史が、国が出来る対応を日々行い続ける。

日を追う毎に背負う物が大きくなっていくのを、聖史は感じていた。

ある日の昼休み時、広く閑散とした、どことなく暗く感じる食堂で聖史がお弁当を食べていると、少し出汁の香りが強い天ぷらうど

んを持った岸本が隣に座った。
「よう新橋、隣良いか？」
「構わないわよ」
　スーツに汁が付かない様にする為か、襟元にハンカチを挟んでうどんを啜る岸本と、その隣でビニール袋から取り出した、丸ごと一本の塩もみきゅうりを齧る聖史。
「お弁当できゅうりが丸ごと一本出てくるとは、その光景は俺にとってショックな物だった」
「親戚が送ってきてくれたきゅうりなの」
　何故だか少し寂しげな顔できゅうりを齧る聖史に、岸本がこう訊ねた。
「そう言えばだいぶ前に親戚の家に行くって言ってたけど、急にこんな事になって行く暇無くなっただろ。落ち込んでないか」
「そうね、もし私が忙しくなくても親戚の家には行けなかったわ」
「そうなん？」
「私の親戚の家、福島なの」

聖史の言葉に、岸本はどう返して良いのかがわからない。
原発事故以降に風向きなどから算出された避難区域に親戚が住んでいたとしたら、そうで無くても、今は福島に住んでいると言うだけで非難を浴びる時勢だ。聖史の親戚に対する心配は並々ならぬ物だろう。
その時岸本は、黙々ときゅうりを囓る聖史の側に、黙って居る事しか出来なかった。

夏の日差しも強くなってきた、久しぶりの休日。聖史は岸本に誘われて、日帰りのドライブへと出かけた。
念入りに日焼け止めを塗った身体に纏っているのは、いつものパンツスーツ姿からは連想しがたい、細かい縦縞模様の入ったクリーム色をしたロングワンピース。つばの広い帽子には、薄手の布で作られたコサージュが付いている。
岸本も折角のオフまで堅苦しい格好をしているのは嫌なのか、丈が長めなモスグリーンのTシャツに、紺色のカーゴパンツだ。
高速道路に乗り、北を目指して走る。

暑い日差しの中、岸本が運転する黄色い軽自動車は、いくつもの県境を越え、数時間を掛けて福島へと入った。
高速から降り、カーナビの案内に従い走る事暫く、閑散とした観光地らしき所へと辿り着いた。
駐車場に車を置き、階段を登った所から見えたのは、青々とした木々に囲まれ、静かに風に吹かれている、鮮やかな碧色をした沼。
聖史と岸本は、静かに沼のほとりへと続く階段を降りる。
少し前までなら、観光地として賑わっていた筈のこの沼だが、周囲には誰もいない。
沼の底でゆらゆらと揺らめく水草を眺めながら、聖史が口を開いた。
「私ね、小さい時にここで初めて手こぎボートに乗ったの」
「ああ」
「その時、一緒に乗ってたお父さんに、落ちたら浮かんでこられないぞって言われたの、今でも覚えてるわ」
「ああ」
少し震える声でそう言った聖史は、帽子を深く被り直し、拳を握

りしめて毅然とした声でこう続ける。
「日本国は、被災地は、特に福島は、今深く沈んでいる。でも、浮かんでこられないなんて言わせない。私は負けない。絶対に」
　歯を食いしばって言われた聖史のその言葉に、岸本はポケットに入れていた手を出し、ぽんぽんと聖史の頭を叩く。
それから、こう言った。
「じゃ、美味しい物食べに行こうか」
　岸本の言葉に、朝から何も食べていなかった事を思い出した聖史のおなかが、小さく鳴った。

　聖史を助手席に乗せ、岸本はまたカーナビを弄り、車を発車させる。
　そうしてまた暫く車に揺られて、通っている道は聖史にも見覚えの有る道だった。
　なぜ岸本がこの道を知っているのか疑問に思ったが、大人しく車に揺られていると、簡易的な木の作りで、震災の影響で建物が歪ん

だのか所々棒が立てられている、小さな野菜の直売所に着いた。
　この直売所は、聖史が親戚の家に訪れる時必ず買い物に来る店だ。
聖史は疑問を口にする。
「何で岸本君がここを知っているのかしら？」
「新橋のお母さんに聞いた。ここで売ってる桃、毎年楽しみにしてるんだろ？」
「……他人のプライベートを詮索するのは、良い趣味とは言えないわよ」
　そうは言っても、ここで買える桃を楽しみにしているのは間違いの無い事なので、聖史は棚に並べられた桃を眺め、奥に有る部屋に声を掛ける。
　すると、いつも店番をしているお婆さんが、奥から杖をつきながらやってきた。
　お婆さんは嬉しそうな顔と声で聖史に話しかける。
「久しぶりに誰か来たと思ったら、聖史ちゃんじゃ無いか」
「うん、おばさんも久しぶり」
　久しぶりとは言う物の、聖史は視線を逸らし、帽子のつばで顔の

上半分を隠してしまっている。
そんな聖史に、お婆さんは桃を一個手に取りこう言う。
「聖史ちゃん、良かったらこの桃を食べていかないかい？
聖史ちゃんが良ければだけど」
今まで自分が作った農作物に自信を持っていたお婆さんが、自分の作ったものを拒否される事に怯えている。その事に聖史は気がついた。
聖史は帽子を脱ぎ、お婆さんに言う。
「食べていって良いのなら、戴くわ。
あと、桃を二個ときゅうりを五本、それとトマトを四個お願い」
ここに来た時、いつも頼む品物と個数を伝えると、お婆さんはにこにことして果物と野菜を袋に詰めて聖史に渡し、それ以外に一個、桃を手に取って奥へと入っていった。
お婆さんが切ってきた桃を、直売所に置いてあった古びたパイプ椅子に腰掛けて、聖史と岸本が食べる。
うっすらとピンクがかったクリーム色の瑞々しい実は、囓ると果

汁が溢れ出し、華やかな香りを口の中で放つ。
「うわ、美味い。桃って山梨だとばっか思ってたけど福島のも負けてないな」
「お兄さん、気に入ったかい？　良かったらもっと切ってくるよ」
「いやいやいや、あんま切って貰うのも悪いんで、もっと食べる分は買っていきますよ！」
　大きく切られた桃を口に詰めてもごもごしたまま、棚に並べられている桃を眺める岸本を見ながら、聖史はデザート用のフォークで刺した桃を一切れ囓る。
「聖史ちゃん」
「はい」
　聖史の隣に座っているお婆さんが、聖史の頭を撫でながらこう言った。
「お仕事辛いと思うけど、わたしは聖史ちゃんの事を応援してるよ」
　その言葉は、今まで被災地の人を守り切れていないと、そう自分を責め続けていた聖史の心に、優しく響いた。
　柔らかく甘い桃を囓る内、聖史の目に涙が浮かんできた。

それを手の甲で拭いながら、聖史は言う。
「まだ泣きたくない……
まだ負けられないのに……」
心細そうなその言葉に、お婆さんは桃の乗せられた皿を聖史に差し出しながら言う。
「泣くのと負けるのは同じじゃ無いんだよ。
泣いて、スッキリして、また頑張れば良いじゃない」
お婆さんに取り留めのない話をして泣き続ける聖史の事を、岸本は果物や野菜を選びながらそっと見守っていた。

直売所で話をして、買い物をして、東京に帰る頃にはとっぷりと日が暮れていた。
渋滞して赤いテールランプが明滅する首都高で、聖史と岸本はお婆さんが揉んでくれた塩揉みきゅうりを囓りながら話をしている。
「私、福島は好きだけど、福島の全部を知ってる訳じゃ無いの」
「どの辺の事知ってんの？」
「親戚の家と、あの直売所。それから杉沢の大杉。合戦場のしだれ桜

と五色沼くらいかしら」
　それだけ話して、暫くきゅうりを囓る音とエンジン音、それにクラクションの音だけが響く。
　少しの事しか知らないのに、守りたいなどと言うのはおこがましい事なのでは無いか、聖史はそう思ったが、きゅうりを一本食べ終わった岸本が空いた袋を聖史に渡し、ハンドルを握り直してこう言った。
「お前はお前の気持ちを信じろ」
　聖史はきゅうりから抜けた水分が溜まっている袋の口を結び、自分の分の残り少ないきゅうりを口に詰め込み、噛みしめた。

第二章　悠希の場合

　新鋭作家としてデビューして三年目の小説家、新橋悠希（しんばしゆうき）はその日、鮮やかな赤色をしたハーブティーをマグカップに満たし、口を付けながらパソコンに向かっていた。
　統合失調症を患ってから十数年、家に籠もっている事が多い悠希だが、家に居る時でも執筆や趣味のアクセサリー作りをする時は、気を引き締める為に、浴衣から着物と袴に着替えている。
　その様子を悠希と同居している、幼なじみの宇宙犬の鎌谷（かまたに）は、「犬の俺にはわかんねーな」と言いながらも職人気質の一片なのだろうと、かねてから眺めてきた。
　窓から差し込む光も柔らかさを持ち始め、これから暖かくなって穏やかな日を過ごせるのだろうなと、悠希も鎌谷も思っていた。
　悠希がパソコンで小説の一節を書き、保存を掛けた所でマグカップの中が空になる。
　新しくお茶を入れてこよう。そう思った悠希が立ち上がろうとした時にそれは来た。

始めは、少し大きいだけの、いつも通りの地震だと思った。
しかしすぐに様相を変え、背の高いパソコンラックを軋ませ、響いているはずの無い、けれども確かに聞こえるその轟音の中、棚の上の物が暴れ始める。
「鎌谷君、危ない！」
悠希は咄嗟に、窓際でくつろいでいた鎌谷を部屋の中心に敷いている万年床の上に移し、覆い被さる。
背中を、棚から落ちてきたクリアファイル、雑誌、アロマポット、薬の袋などが叩く。
鎌谷を抱えたまま揺れが収まるのを待ち、静かになった部屋を見渡すと、ベランダに面した大きな窓ガラスに、一筋の罅が走っていた。
「馬鹿お前、犬の俺より自分の事心配しろよ」
大きな揺れのショックか、息を切らせながら発作止めの薬を飲む悠希に、鎌谷がぶっきらぼうながらも心配そうな声を出す。
冷蔵庫に入れて置いた冷たい麦茶で薬を飲み下した悠希が、少し

青ざめた顔に笑みを浮かべて鎌谷の頭を撫でる。
「だって、鎌谷君は僕の友達だもん」
　それから、震える手と腕で、鎌谷の事をまた抱きしめた。
　自分の腕の中に収まってしまう程小柄な鎌谷を抱えたまま、呼吸を整える。
　鎌谷の温もりを感じたまま息を吸って、吐いて。繰り返して気持ちが落ち着いてきた所で、インターホンの音が鳴った。
　誰だろうと思いながらインターホンを取る。
「はい、どちら様ですか？」
「こんにちは。
美夏（みか）だけども、悠希さんと鎌谷君は無事？」
「部屋の中はごちゃごちゃになっちゃいましたけど、大丈夫です」
　突然訪れた同じアパートに住んでいる友人である美夏は、鬼気迫った様子で悠希にこう指示を出した。
　まず、バスタブに溜められるだけ水を溜める事。それから、食料の確認。もし米があるのなら、炊けるうちに炊いて置く様に。そう言った物だった。

美夏と悠希がインターホン越しに話している間にも、着信音とおぼしき電子音が聞こえてくる。
「それじゃあ悠希さん、その辺の事よろしくね。私は呼び出しが掛かったから行かなきゃ」
「はい、お疲れ様です」
そう言って受話器を置き、悠希は早速バスルームに行き、バスタブに栓をして蛇口をひねる。すると、蛇口から出てきたのは赤茶けた水だった。
徐々に溜まっていく、鉄錆の混じった水を見て恐怖を覚える。
竦む脚を何とか動かし、台所に有るシンクの下を確認すると、そこには先日買い溜めたばかりの犬缶、それから、普段は余り食べないが米がいくらかある。
悠希自身は普段液体栄養缶を飲んで食事を済ませているのだが、もし鎌谷用の犬缶が無くなった時の為に、冷蔵庫に入れて置いた、ポットに入っている昆布のだし汁で米を炊く準備をする。
水道から出る水は鉄錆が混じっていて使えないので、米を磨ぐ事は出来ない。それでも、無いよりはましだろうと炊飯器のスイッチ

を入れた。
　悠希が食料の確認と確保を済ませた所で、鎌谷が地震速報を見ようとテレビを付けた。
　食料がある程度確保出来ている事で、少し落ち着いた様子の悠希も鎌谷を膝の上に乗せてテレビを見る。
　するとテレビに映し出されたのは、押し寄せてくる海の映像。
　船も、車も、家をも押し流すその映像に、悠希も鎌谷もただ呆然とするしか無かった。

　それから数週間後。
　首都圏は電車などの交通機関も落ち着き、皆が普段通りの生活を送る様になった頃、悠希は書き上がった新作のデータを持って、自分の本を出版している『紙の守出版』という会社の編集部へと赴いた。
　ビルのエレベーターで昇り、エレベーターのすぐ目の前、所々塗装の剥げている鉄の扉の脇に付いている呼び鈴を押す。
　すると出てきたのは、髪の毛をふたつのお団子に結い、シンプル

なタートルネックのニットとタイトスカート姿で、首から水色のロザリオを下げた女性だった。
「新橋先生こんにちは。
今日は原稿のデータを持って来たんですよね？」
「そうなんです。
それと、ちょっと美言さんに相談があって……」
「相談、ですか？」
　美言と呼ばれたこの女性は、この出版社での悠希の担当だ。
　元々悠希自身は締め切りに余裕を持って原稿を仕上げる質ではあるのだが、美言にはプロットの段階でのアドバイスを貰ったり、本の装丁や、それ以外の事、細々とした事の相談にも乗って貰っている。
　書類の積まれた机の並ぶ編集室を抜け、一人がけのソファが向かい合わせに置かれている応接間へと入り、二人が腰掛けた所で悠希がこう言った。
「実は、僕が書いた本の売り上げの一部を、復興義援金として被災地に寄付して欲しいんです。

出来ません……か？」
　それを聞いた美言は、ロザリオの先端にぶら下がっている十字架を指でさすりながら答える。
「そうですね。
私個人の意見として言わせて戴きますと、義援金は新橋先生個人が、自分のお金で寄付すればと、そう思います」
　美言の言葉に、悠希は俯いて呟く。
「そうですよね。やっぱり、個人で出来る事からやらないと……」
　落ち込んだ様子の悠希だが、その呟きを遮って美言が言う。
「ですが、復興支援を我が社が表立ってやる事により、言葉は悪いですが、我が社のイメージアップ、更には収益増も見込める様でしたら、検討しても良いかもしれません」
「美言さん……」
　確かに、美言の言う言葉をそのままに捕らえると、被災地を食い物にしていると捉えられる。
　けれども、企業である以上、収益の見込めない物にお金を回す訳には行かないのもわかる。

悠希は美言の言葉を受け止めた。

　そうしている間にも他の社員が持って来たお茶を二人で飲みながら、話をする。

「それにしても、新橋先生だったら『被災地に祈りの千羽鶴を送ろう』と言って鶴を折る作業でもするのかと思っていました」

　意外そうにそう言う美言に、悠希は苦笑いしてこう答える。

「いや、流石にそれは……こういう時に必要になるのは、千羽鶴じゃ無くてお金だって言うのは、阪神淡路大震災の時に知りましたから」

「国の支援を待つのではいけないのですか？」

「国のお金も元々は僕達国民のお金だから限界があるし、日本国を運営するのに予算とかを決めている訳で、国の支援だけを頼りにするのは不安かなって、思うんです」

「なるほど。新橋先生が思ったよりしっかりした人でびっくりしました」

「今まで僕の事どんな目で見てたんですか？」

暫くそんな話をして、悠希は美言に原稿のデータを渡して。
取り敢えず、被災地支援の件については後ほど悠希に結果を伝えると言う事になり、悠希は紙の守出版編集部を後にした。

それから数日後、悠希が次の原稿に取りかかるまでの間の日。インターネットでアクセサリーの手作りブログを見ている時に、音声チャットの着信が入った。
音声チャットのＩＤは紙の守出版、つまりは美言の分しか登録していないので、美言からの着信だというのがすぐにわかる。
「もしもし、美言さんですか？」
悠希がマイク付きヘッドホンを被り通話を始めると、美言が先日の被災地支援の件について、上層部からの決定が出たと言う。
どんな決定が出たのか、悠希は不安と期待を抱えながら美言の言葉を待つ。
すると、美言が言うにはこうだった。
「会議の結果、新橋先生の作品の収益から一部を、被災地支援に充てる事を許可すると言う決定が出ました」

「本当ですか！」

体の弱い自分でも被災地の人達の役に立てる。そう思い喜ぶ悠希に、美言はただし。と条件を述べる。

その条件とは、被災地支援の為に書き下ろしの小説を、文庫本一冊分書き下ろす事。

書き下ろしたその小説を本にして出版し、収益の一部を募金すると言う。

それからもう一つ。その本に関しては悠希の分の印税も減る事になる。

それでも構わないのなら、被災地支援を紙の守出版社として行うと、美言は言う。

美言の言葉に、悠希は一瞬考える。

印税が減る事が嫌なのでは無く、問題は書き下ろし小説の納期だ。納期について訊ねると、美言は特に納期は定めないが、定期的に書いて居る小説の納期に影響が無いようにとの事。

付け加えて美言はこう言う。

「納期は定めませんが、早く仕上がれば仕上がった分だけ、早く支援

が出来る事になります。これはお伝えしておきますね」
冷たくも聞こえる美言の言葉に、悠希は手を握りしめて答える。
「……わかりました」
震えているけれども決意の籠もったその返事を、鎌谷が悠希の座る椅子の後ろで耳を立てて聴いていた。

その日から悠希は、小説二本分のプロットを立て始めた。
一本は定期的に出しているシリーズ物のプロットで、もう一本は被災地支援用のプロットだ。
片方に詰まったらもう片方を。それを繰り返し、徐々に内容を詰めていく。
寝る時間と起きる時間は普段通りだが、いや、このペースが崩れると効率が悪くなるのがわかっているので普段通りにしているのだが、プロットに掛ける時間の割合が、一日の中で多くなった。
パソコンから離れ、布団の側にあるちゃぶ台に二冊のプロットノートを広げ、膝の上や周りには資料になる本を散乱させている。
元々プロットを書く時は資料を見ながら書いているのだが、ここ

まで資料を散乱させている様を見たのは、鎌谷も初めてだ。
そして、悠希は資料が散らかっている事に気付いていない。
悠希が片方のプロットノートにしおりを挟んで閉じたのを確認した鎌谷が、すかさず悠希の頭を鼻で小突く。
「落ち着けよ。
そんな煮詰まった頭で突貫工事しても良いモンは出来ねーぞ」
「鎌谷君、でも」
「でもじゃねぇよ。
グダグダな状態で書いたって出来上がるのはグダグダなもんだってのは、お前だってわかってんだろ。少し休め」
そう言って鎌谷が悠希の襟元を咥え、後ろに引っ張る。
すると、悠希もそれに釣られてそのまま後ろにある布団へと倒れ込んだ。
天井を見る悠希の目に、涙が浮かぶ。
「でも、僕に出来るのはこれくらいだし」
しゃくり上げて泣く悠希の頬に、鎌谷は鼻を押しつけて宥める。
「そうだな、お前に出来んのはこれくらいだな。

だから、頑張ってんのはわかっけど、無理すんのとベストを尽くすのは違うんだぞ」
　鎌谷が涙を舐めて拭っているのを感じながら、悠希は暫く泣き続けていた。

　それから一、二時間後。悠希も落ち着き一旦プロットノートを両方閉じてお茶を飲んでいた時の事。誰かが悠希の部屋の呼び鈴を押した。
　誰かと思いインターホンで出ると、同じアパートの同じ階に住んでいる友人の、カナメだった。
　一体何の用なのかと、緊張しながら訊ねると、アクセサリーの製作依頼を受けたのだけれど、その事で悠希に相談があるという。
　悠希もカナメも、アクセサリー作りを趣味としている。
　一緒に作業をした事もあるが、悠希はその時の事を思い出し、ふっと頬を染める。
　取り敢えずカナメに上がって貰い、悠希は慌てて万年床を畳む。
「ごめんね悠希さん、急にお邪魔しちゃって」

「ううん、大丈夫だよ。今、丁度締め切りまで間がある時期だし」

緑の長袖カットソーに生成りのワンピースを着て、スカート部分を不安そうに握っているカナメに、悠希はちゃぶ台の側に座る様に勧める。

それから、はたと気付いた。ちゃぶ台の上にはプロットノートが置きっぱなしだったのだ。

「あの、悠希さん、やっぱり忙しかったんじゃ……」

「ううん、今丁度休憩してた所だから！さっき鎌谷君にも休めって言われたから、今日はプロット練るのこの辺にしておこうかなって」

「そうなの？」

不安そうなカナメを座らせ、プロットノートを慌ててパソコンラックに移した悠希は、冷蔵庫の中から麦茶を出し、台所から持って来たマグカップ二つに注ぎ、片方を差し出す。

それでようやく安心した様子のカナメと、アクセサリーについての相談の話をする。

何でも、アンティーク風のデザインのアクセサリーが欲しいと言われた様なのだが、アンティーク風と言われてもカナメにはピンとこなかった様で、アンティークジュエリーとはどんな物なのか。と言う相談に来たそうだ。

カナメの話に悠希は、丁度アンティークジュエリーの資料があると言って本を何冊か取り出して見せる。

様々な宝石で彩られているアンティークジュエリーの写真を、悠希が解説しながら見る。

本を一通り見た後、カナメが得意とするプラバン細工と9ピンワークでアンティーク風にするにはどうしたら良いかという案を二人で出し合い、時折談笑する。

楽しそうに笑うカナメを見て、悠希は少し気持ちが楽になった。

それから二ヶ月後。

美言に助けられつつプロットの見直しを何度か繰り返し、小説の本文が出来上がった。

これから校正などが色々入るが、被災地支援の為の準備の第一段

階が終わった所だ。
「じゃあ鎌谷君、美言さんの所に行ってくるね」
「おう、気をつけてな」
データの入ったＳＤカードを持って玄関に立つ悠希。
その背中に希望を背負っている様に、鎌谷には見えた。